

18. 高次脳機能障害を呈した高校生に対する、記憶・遂行機能へのアプローチと復学支援

広島県立障害者リハビリテーションセンター¹，県立広島大学²

○月本 ^{つきもと} 摩紀 (OT) ^{まき} ¹，林 加容¹，光戸 利奈¹，川原 薫¹，丸石 正治²

【はじめに】

片麻痺と高次脳機能障害を呈した学生が復学する際、身体機能面からだけでは理解できない学校生活での難しさをかかえている。今回、入院時からの学校との連携により、学校生活の準備や、環境調整を行い、比較的スムーズな復学につながった高校生のケースを経験することができたので、考察し報告いたします。

【事例紹介】

年齢：20歳代 性別：男

診断名：外傷性脳損傷、びまん性軸索損傷

障害名：左片麻痺、高次脳機能障害

現病歴：H18.5 交通事故にて病院へ搬送

H20.10 約2年間の入院リハビリ後、
2/W 通院しながら特別支援
学校に復学

起居動作が軽介助となり、身の回りのこともできることが少しずつ増えてきていたが、自宅では一度獲得したことを忘れてたり、一日の見通しが立てられない

H21.5 更なる高次脳機能面のリハビリ
目的にて当センターに入院

入院期間：平成21年5月～8月

【初期評価】

[BRS] 左 上肢Ⅱ 手指Ⅰ 下肢Ⅰ

[TMTA] 中止 [TMTB] 282秒

[HDS-R] 17/30点 [MMSE] 17/30点

[WAISⅢ] VIQ=68 PIQ=50 FIQ=57

[起居動作]

寝返り・起き上がり：手すり使用にて可能
立ち上がり・移乗：軽介助

[ADL] FIM62/126

日常生活のほとんどの項目で声かけが必要
[注意力]

課題に集中することが難しく、周りのものに注意がそれてしまう。難しい課題では特に注意が途切れやすく、すぐに諦めたり、全く関係ない話を始めてしまう

[記憶力]

数分前の食事の内容や、前日リハビリで行ったことを思い出せない

[遂行機能]

一日の流れを把握しておらず、学校に通っていることも自分で思い出せない

[評価まとめ]

声かけをしなければ何をしたいかわからず、ぼーっと過ごしてしまう。目に付くところに置いてあっても、スケジュールボードを見て自分から行動することは出来ない。前病院で

一度獲得したこともほとんど忘れている。

【OT プログラム】

- ①ADL 練習
- ②注意課題
- ③記憶課題
- ④メモリーノートの活用

【経過】

<OT プログラム>

着替えなどの ADL の再獲得、また、机上での注意課題、記憶課題を行うと共に、以下の点に重点を置きながらリハビリを行った。

- 1) リハビリ室でのファイルや道具の位置を固定する
- 2) メモリーノートは、直後の予定が把握できるような形式とする
- 3) メモリーノートと、携帯のアラームを使用することにより、自分から動いていけるようにする

<学校との連携>

一度復学した際に問題となったことを聞き取りし、その改善に向けて、教室の間取りや、授業スケジュール、準備物などについて情報交換を行い、リハビリで行っていたことで学校生活にそのまま活かせることを提案する。

- 1) 教科書や、教材などを置く棚を一箇所にまとめ、そこに行けば、授業に必要なものがすべて準備できるようにする
- 2) リハビリで使用していたのと同じ形式のメモリーノートを使用し、次の授業、準備物、移動教室が把握できるようにする

- 3) アラームの使用だけを条件に、学校内での携帯電話の使用を許可してもらい、休憩時間ごとにアラームのサインで自分からノートを確認し、行動するようにする

【退院時評価】

[BRS] 左 上肢Ⅱ 手指Ⅰ 下肢Ⅰ

[TMTA] 360 秒 [TMTB] 170 秒

[HDS-R] 20/30 点 [MMSE] 22/30 点 (見当識で改善あり)

[ADL] FIM70/126 更衣、食事場面などで介助量軽減

[注意力] 見通しが立ちやすくすれば、ある程度集中して課題を行なうことができる

[記憶力] 毎日繰り返して行っていることであれば、積み重ねで覚えていることが出来る

[遂行機能] メモリーノートを見て自分から動けることが増えている

【まとめ】

今回のケースは、一度獲得したこともすぐに忘れてしまう、一日の見通しが立てられないといった高次脳機能障害が見られた。それらの見えない障害による学校生活の難しさを、入院時から家族、学校と情報交換し、問題点を焦点化してアプローチすることで、一定の成果を得ることができた。また、その成果を学校生活でそのまま活かすために、繰り返し情報交換や環境調整を行うことにより、本人も混乱なく、スムーズな復学につながったと思われる。